



巻 頭 言

ち ょ っ と し た こ と

(財)日本植物調節剤研究協会 常務理事 小澤 啓男

狭い日本では、農産物の生産現場である『たんぼ』や『はたけ』を見ようと思えば、誰でも容易に接し得る。特に、郊外に住んでいる人は犬の散歩の際でも、ジョギングしながらでもイネやムギ、野菜や果樹など農地の四季折々のさまを、ほんの目の当たりにすることができる。

その地域に住む人々にとってはこれが環境であり、自然そのもの、との感慨を深めているものと思う。このように身近に見る環境を、自分達のものとして理解し、護ってくれることは非常にありがたいことであり、自らも環境を構成する一要因であることを理解して、十分に心がけて欲しい。が、ちょっとしたお節介だけはやめて頂きたいものである。

人それぞれの生き方があり、生業があり思想もあって、それはそれで結構なことです。が、農家が農薬を利用することをもって、自然破壊、環境の敵のように決めつけるのは如何でありましょうか。

農作物の生産に携わらない人達にとっては、野菜の葉をもりもり食べる幼虫などは問題でなく、空中を華麗に舞う蝶が、畑や水田に発生する雑草には興味がなく、道野辺に咲く可憐な草花に興味を持つ。しかし、農家にとってはその幼虫が問題であり、作物の生育を脅かす雑草の発生が困るのです。手で殺したり、抜けば良いと言うかもしれませんが、その苦労を本当にご存知なんでしょうか。

話は変わりますが、NHKの山根さんの最近の著書『であいの旅』の中で、世田谷ケーブル溝火災をとりあげた一節で、普通出前を嫌がる

ソバ屋が『電話の出前注文がなく、もう死活問題です』と語っている下りがある。電話が不通でも大して困らない人が、たちまちに、なぜそんなに大げさに困るだろうか？ これは放送関係者の期待に応えて、ちょっとだけ事実を誇張してみたただけだろうと言う。しかし、取材する側も、される側も、このニュースを見聞きする人々も、『ほんのちょっとした誇張』に慣れ切ってしまったのではと、取材側に身を置く者として喉に小骨の刺さった気分であったと反省しておられる。

多くの消費者の農薬批判は、このちょっとした気分で、ほんの世間話程度かもしれないが、農家にとっては、ちょっとした不便ではすまされない。

農家は許可のない農薬を使うわけではない。登録されたものを使用基準通りに使っている。現状でも、問題ないものであるが、叡智を結集してより使い易い、確実な農薬開発に関係者一同努力しているから、今後は、更に低毒性で、対象の雑草、害虫、病菌など以外のものには影響しない優れた選択性のあるものによって変わる。これを受けて、使用する側も、無駄のない活用が図られる。

ほんのちょっとしたこともかもしれませんが、このちょっとしたこと、ほんのちょっとしたことも積み重ねられると、とてもその程度ではすまなくなり、大きく筋道からそれてしまう危険性があります。ちょっとしたお節介はもうやめませんか。俗に、言うではありませんか、『餅は餅屋に任せなさい』と。